

ノートを見ると授業がわかる

学びが **残る** **わかる** ノート指導を目ざして

元新宿区立西戸山小学校教諭 やす だ きょう こ
安田 恭子

成績をつける資料にと思って、子どもたちのノートを集めてみたら、漢字の練習と、語句の意味調べばかり。たまに違ったことが書いてあると思ったら、お話の題名と、登場人物の名前。ノートって、これでいいのかな？



いつもワークシートを使って学習を進めています。集めて点検するのも便利だし、何を指導するのかがわかるし……。でも、学習したものが残らないし、せっかくまとめてとじてても、次の学習で見ることはほとんどありません。ほかの先生は、ノート指導をどうしているのでしょうか？

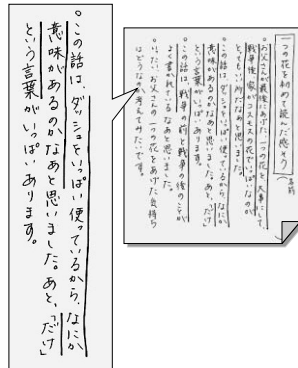


ノートを見ると、学習の流れや、その教材のどこで、何をどう学んだかがわかると言われます。ぜひ、学びの足跡が残る、何を学んだかがわかるノートにしたものです。ノートの実例も示しながら、ノート指導の一例を紹介しましょう。

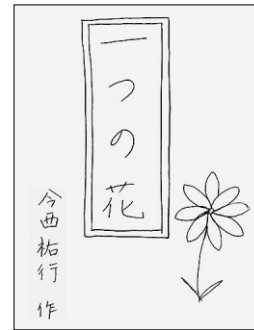


『一つの花』(四下)のノート例

・初発の感想を書いた用紙(回収して教師がチェックしたもの)を貼ると効率がよいでしょう。

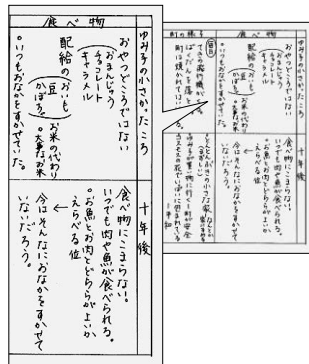


・表紙のページ。題名、作者名は必ず書きます。その子のイメージでイラストをかいたり、色をぬったりしてもよいでしょう。

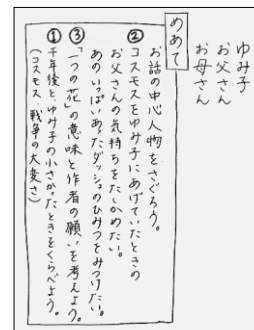


決められた手順にそって
はいるが、各自が自由に書
くページ

・ゆみ子の小さかったときと、十年後ではどんなところが違うかを学習した板書を写したノートです。

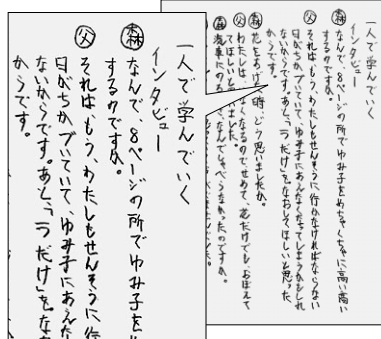


・登場人物の確認をします。学習のめあてを簡条書きにし、学習の流れも相談して記録します。



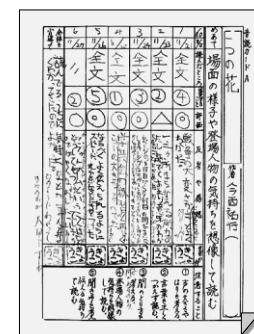
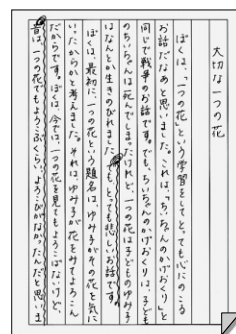
一斉指導で教師が板書したものを写したページ

・同じめあてについて、二人の児童が一人学びをしたノートです。それぞれの方法で、お父さんの心情に迫っています。



一人学びでそれぞれの児童が自分らしくめあてを追究したページ

・音読カードや終末の感想文もノートに貼っておくと、学習のまとめが見える形として残ります。



まとめのページ

よりよいノートにしていけるための 4つのポイント



- ①まずは、パターン(型)を作ろう。
- ②板書を写すノートから、児童が「創る」ノートへ。
- ③プリントやカードも、大切な記録。
- ④子どもの遊び心も大切に。

1

例えば、読みの教材のノートは、次のような型はどうでしょうか。

- ・単元名、教材名
- ・初発の感想
- ・めあてや学習計画
- ・読み取りの実際
- ・締めくくりの感想

3

・初発の感想の用紙
・一人学びの振り返りカード
・音読カード

これらは、学習の流れに沿って、ノートに貼っておくとういでしょう。

さらに、資料として与えた全員の感想メモや作者紹介のプリントなども、ノートからはみ出さないように工夫して貼らせたいものです。

2

学習は、一斉指導だけでなく、個別指導を取り入れ、児童が自分でノートを「創る」場をもちます。一人学びに懸命に挑戦し、自分だけの読み取りが残るのは、うれしいものです。

叙述の書き抜き、主人公の気持ちの吹き出し書き、作者へのインタビュなど、それまで学んできた方法を生かして、ノート創りをさせましょう。

4

例えば、教材名を書いたページに、好きな挿絵をまねしてかいたり、主人公のせりふを書くときに、主人公の顔をイラスト風にかいて吹き出しをつけたりするなど、その子その子の遊び心も大切にします。

そこでおすすめが白紙のノートです。大切な言葉を大きく書いたりするときも、ます目や野線にとらわれずノートが創れます。

最初だけでなく最後まで丁寧なノートを

京都女子大学教授 吉永 幸司

(1) 「よい授業でしたか」と問われたら

授業を終えて職員室へ戻った時、「今日の授業はどうでしたか。」と尋ねられたら、ためらうことなく「よい授業でした。子どものノートを見て下さい。」と言えたらいいなと思っている。ノートを見れば授業の善し悪しがわかるからである。

(2) ノートを教科書・板書とかかわらせる

よいノートにするにはどうしたらよいのだろうか。教科書・板書とノートの関係を学年ごとに考えてみたい。

低学年では、教科書に出てくる大事な言葉や文を黒板に書く授業が多くなる。それは、できごとの順序や登場人物、大事な語や文に注目させたいからである。文字を大きく書いた絵を貼ったりするため、板書はどれも大事であり、丁寧に黒板をノートに写すという活動に時間をかける必要がある。

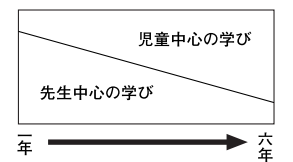
中学年では、大事な語や文は何かということから、語や文の関係がどうなっているのかということを経教科書から見つけて板書する。また、話し合いで話題になったことを次々と板書することもある。教科書の語や文と内容が入り交じってくるため、ノートには、自分の考えと比べて、同じ内容や違うところを見分けながら書いていくように指導する。そうすると、板書を参考にして、自分の考えが残るノートになる。話し合いながら書き加えたり、記号を使って関係を見つたりするのである。

高学年では、教科書の文章を写し、大事なことを抜き出したりする活動を増やすと、ノートが引きしまってくる。発問と答えという問答中心の授業から、自分の考えを大事にする授業に変えることで、ノートの占める位置が大きくなっていく。板書と自分のノートを比べて、教科書を読み直し、確かな考えを作りあげようとする活動が増えるのである。

ノートのどのページにも、それぞれの時間の真剣な学習の跡があるようにしたい。そのためには、ノートに書く時間を授業で確保することが大事である。宿題に任せるのではなく。



ノートを児童一人ひとりのものにするためには、学習それ自体にも個の学びの部分が必要です。右図のように、一年から六年に進むにしたがって、先生中心の指導から児童が主体的に学べるように学習を組み立てるとよいでしょう。



何事も、初めからうまくできるわけではありません。繰り返しの指導の中で、一つのパターンにつけ加えたり、省略したりもして、その子その子のノートになるのです。

さらに、今までの記録がノートに残っているからこそ、次の学習に役立つのです。ときにはノートコンテストをして、互いのノートを見合うのも、よいノート創りに役立ちます。